未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2021（第 5 号）

図書館とポスト真実

未来の図書館 研究所

樹村房（発売）

2022

Library and Post-Truth

The libraries of the future research, Inc. Annual Report. 2021 (Vol.5)

The libraries of the future research, Inc.

Distributed by Jusonbo

Tokyo, 2022

はじめに

ロシアの独立系新聞『ノーバヤ・ガゼータ』の休刊発表があった（2022 年 3 月 28 日 20 時 49 分）[1]。その編集長ドミトリー・ムラトフさんが昨年のノーベル平和賞を受賞したこともあり，昨今の情勢でどうなるかと多くの人々が気にしていたと思う。案の定，ウクライナ侵攻で休刊に追い込まれた。これまで政権を批判して 6 名もの記者が殺害された。それでも頑張ってきた『ノーバヤ・ガゼータ』が一日も早く蘇えることを祈りたい。報道は人々に真実を知らしめる最も効果的な手段であるがゆえに，しばしばこのように最初に封じられてしまう。ついこの間まで，アメリカも同じような轍にはまっていた。前大統領はメディアの発するものはフェイクニュースばかりとさかんに攻撃し，自己正当化のために「もう一つの事実」を唱え，「ポスト真実」といった言葉が使われていた。

ピュリッツァー賞を受賞したミチコ・カクタニが『真実の終わり』[2]（2018）という著作の冒頭で「人類の歴史において，最も酷い政権のうちの二つが 20 世紀に権力を握った。その両方が，真実への冒涜と略奪に基づいていた」と記した。この一文に接したとき，私たちは前世紀のこの状況のつづきにいる，この問題が終わってはいないどころか，むしろ情報社会の到来とともに，もっと深刻化してしまったのではないかと思った。そして，公共図書館というものが，ユネスコ公共図書館宣言にあるように，教育，文化，情報の活力であり,民主主義を発展さ

せる必須の機関というならば，図書館がこの状況にどう対応するかをもっと考えねばならないと，昨年秋に「図書館とポスト真実」というテーマでシンポジウムを企画した。

本書は前半で，未来の図書館研究所で行ったこのシンポジウムの議論を掲載する。

冒頭に図書館におけるこの問題の関わりを確認の後，まずは東京工業大学の笹原和俊さんに，「フェイクニュースはなぜ拡散するのか？」と題して，ネットワーク上に急速に拡がったソーシャルメディアにおけるフェイクニュースの拡散の背景と，そしてその拡散の原因となる認知的な要因や情報環境的要因を，計算社会科学による分析を交えて，わかりやすく論じていただいた。

次に毎日新聞の伊藤智永さんには，「ニュースが『つくられる』現場から」として，特派員時代の三つの取材（①新型インフルエンザ，②ギリシャ経済危機，③アラブの春）を事例として，報道で伝える事実の位置づけの難しさ，さらに政治報道のもつ本質的な問題や冷戦以降のポスト構造主義的な思想的潮流，そして技術の加速によるメディアの変化状況などをうかがうことができた。

その後，ネットワークでつながった参加者を交えたディスカッションがあり，そこで行われた質疑応答は，テーマごとの議論の間にその内容を挟み，編集した。

本書のもう一つの焦点は，図書館に関わる新たな領域，あるいは新たな視点を拓く議論である。三人の論考を掲載している。

最初に，一般社団法人国際 STEM 学習協会・ファブラボ鎌倉代表の渡辺ゆうかさんが，今世紀に入って欧米の公共図書館の様相を大きく変えたメイカースペースをとりあげてくださった。彼女自身のファブラボ実践に基づき図書館におけるファブラボ（メイカースペース）の可能性を展望し，21 世紀型スキル（創造力，批判的思考，問題解決，メタ認知，コラボレーション，コミュニケーションなど）を習得する場としてこれを位置づけている。またこれまでに行われた学習効果についての実証実験の結果も織り込んでいる。

次に，図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクターの太田剛さんから，「持続可能な社会づくりと読書～「利他」で考える読書推進計画の試論」である。この論は，持続可能な社会づくりの拠点として期待される「図書館」の「読書活動推進計画」において，「教養」のとらえ方に「利他」の考え方を取り入れることで，読書，図書館，そして生涯学習社会像を模索する試みである。これまで取り組まれた読書推進活動で用いたコースウェアなどの実践プロセスは興味深い。

三番目は筑波大学図書館情報メディア系の村井麻衣子さんの，「未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて」である。令和 3 年の著作権法改正の，特に図書館に関連する国立国会図書館の絶版等のインターネット送信と各図書館等による図書館資料の公衆送信を中心にとりまとめていただいた。前者の「個人向けデジタル化資料送信サービス」は本年 5 月 19 日

からの開始が国立国会図書館から発表されたが[3)]，後者は協議中である。今後のあり方に関しても，なお見通しにくいところだが，著作権に関する第三の波にも触れつつ，未来の図書館を指向した明晰な議論を展開している。

なお，本書はこれまで「未来の図書館 研究所 調査・研究レポート」としてA4判で刊行してきたものであるが，手に取りやすい判型に改め，また多くの方々が書店などでも求められるように努めた。当研究所も5周年を終え，新たな段階を迎えている。これまで支援いただいた皆さまに謝意を表するとともに，さらに多くの方々の期待に応えられるよう本シリーズの刊行を続けてゆきたい。皆さまの変わらぬご支援，ご鞭撻をお願いしたい。

2022年4月

未来の図書館 研究所
所長　永田 治樹

【注・参考文献】

1）NovayaGazeta. https://novayagazeta.ru/articles/2022/03/28/my-priostanavlivaem-rabotu（accessed 2022-04-07）

2） Michiko Kakutani. The Death of Truth. New York, Tim Duggan Book, 2018.（ミチコ・カクタニ，岡崎玲子（訳）．真実の終わり．集英社, 2019, p.7.）

3） 国立国会図書館.「個人向けデジタル化資料送信サービス」の開始について（令和 4 年 5 月 19 日予定）. https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2021/__icsFiles/afieldfile/2022/01/28/pr220201.pdf（accessed 2022-04-07）

目次

口絵 1～8

はじめに …… 3

■ **図書館とポスト真実 …… 11**

【シンポジウムテーマの趣旨】…… 永田 治樹 14

「ポスト真実」と「フェイクニュース」／「ポスト真実」下の図書館

【講演】「フェイクニュースはなぜ拡散するのか？」 …… 笹原 和俊 21

1. はじめに …… 22

フェイクニュースの種類／SNS は情報拡散装置／偽ニュースは速く遠くまでたくさん伝わる／インフォデミック／5G 陰謀論／ 5 G 陰謀論に関連するツイートの拡散／陰謀論を増幅する Bot／トイレットペーパー・ツイートの拡散／反ワクチン運動（有害性が高い）

2. 見たいものだけ見る私たち（認知的要因）…… 33

認知バイアス (>180) ／偽ニュースの拡散に関与する認知バイアス／バックファイアー効果／感情は伝染する／Q&A 1

3. 見たいものしか見えない情報環境（構造的要因） 39

ソーシャルメディアの理想と現実／エコーチェンバー／米大統領選 2020 のエコーチェンバー／SNS はエコーチェンバー化を加速する／フィルターバブル／ツイートが運ぶ個人属性／多様なつながりの強さ／メディアリテラシー／Q&A 2・3・4

4. まとめ …… 50

Q&A 5

【講演】「ニュースが『つくられる』現場から」 **52**

…… **伊藤 智永**

1. 特派員時代の三つの取材 …… 53

①新型インフルエンザ（2009 年）／②ギリシャ経済危機（2009 年）／③アラブの春（2010～12 年）

2. 21 世紀政治の「ポスト真実」 …… 62

①本質：政治のウソ／②宣伝：プロパガンダ，ストーリー化／③技術：驚異的な変化，広がり／④思潮：リベラルの退潮

3. 冷戦終焉と歴史修正主義 …… 66

Q&A 6

追補（ディスカッションから） …… 73

技術とメディア／Yahoo ニュース／あなたの記事はなぜ読まれないのか／図書館というメディア／Q&A 7・8

■ 図書館におけるファブラボ（メイカースペース）の可能性 **83**

…… **渡辺 ゆうか**

1. はじめに …… 84
2. 進化する図書館 …… 85
3. 21 世紀型スキルと図書館 …… 88
4. 日本国内のファブラボの動向について …… 92
5. ファブラボを通じた学びとその効果 …… 94
6. おわりに …… 102

■ 持続可能な社会づくりと読書 **114**

～「利他」で考える読書推進計画の試論

…… **太田 剛**

1. はじめに …… 115
2. 読書活動推進計画に感じる“違和感” …… 116
3. “読書推進”の基盤として考える「利他論」 …… 126
4. おわりに …… 136

■ **未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて　143**
－令和 3 年著作権法改正の意義と課題－
…… **村井 麻衣子**
1. はじめに …… 144
2. 令和 3 年著作権法改正における図書館関係の
権利制限規定の見直し …… 145
3. 未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて 150

未来の図書館研究所主催シンポジウムの記録 …… 177
あとがき …… 181

図書館とポスト真実

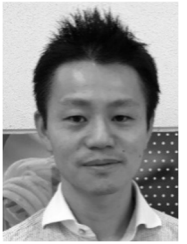
開催日　2021 年 11 月 8 日（月）
Zoom および YouTube によるオンライン開催

講演者・パネリスト　笹原 和俊
伊藤 智永
コーディネーター　永田 治樹

主催　株式会社 未来の図書館 研究所

■ 登壇者プロフィール

笹原 和俊（ささはら・かずとし）氏／東京工業大学准教授



2005 年東京大学大学院総合文化研究科修了。博士（学術）。名古屋大学大学院情報学研究科講師を経て，現在，東京工業大学環境・社会理工学院准教授，国立情報学研究所客員准教授。2009 年カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員，2016 年インディアナ大学客員研究員。2016 年～2020 年 JST さきがけ研究者。専門は計算社会科学。著書に『フェイクニュースを科学する　拡散するデマ，陰謀論，プロパガンダのしくみ』（化学同人）など。

伊藤 智永（いとう・ともなが）氏 ／ 毎日新聞専門記者

東京大学文学部卒，毎日新聞入社。政治部，経済部，外信部で主に政治・外交を担当。ジュネーブ特派員として新型インフルエンザ大流行，アラブの春，ギリシャ経済危機などを取材。オピニオン担当編集委員，論説委員を経て，現在は毎月第 1 土曜日に政治コラム「時の在りか」を執筆。著書に『靖国と千鳥ケ淵』（講談社＋α文庫）『忘却された支配―日本のなかの植民地朝鮮』（岩波書店）『「平成の天皇」論』（講談社現代新書）など。

＜シンポジウム記録の構成にあたって＞

「図書館とポスト真実」をテーマに開催された未来の図書館研究所第 6 回シンポジウムの記録を次の構成により所収した。

1. 講演のなかに，シンポジウムで配付された資料に基づき，見出しを挿入した。
2. ディスカッションの質疑を「*Q&A*」として本文の間に入れた。
3. 講演でパワーポイントや Web サイトの図に言及している部分については，当日のパワーポイントのスライドの一部を抜粋し口絵として冒頭に掲載した。Web サイトについては参照 URL を挿入した。
4. 挨拶や進行に関わる部分，ディスカッションの一部は割愛した。
5. 末尾に注・参考文献を付した。

【シンポジウムテーマの趣旨】

永田　治樹（未来の図書館 研究所 所長）

「ポスト真実」と「フェイクニュース」

今回のシンポジウムのテーマは「図書館とポスト真実」です。「ポスト真実（post-truth）」という言葉が，2016 年に権威ある英語の辞書『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー（The Oxford English Dictionary：OED）』によって，「今年の言葉（Word of the Year）」に選ばれました。英国の EU 離脱に関する国民投票と，米国の大統領選挙の関係でこの言葉が，その年に，前の年に比べて 20 倍も多く使われました。その意味は「客観的事実よりも，感情的な訴えかけや個人の信念のほうが，政治的議論や世論形成に大きく影響する状況」をいいます。いうならば，人々は事実をときに無視して，自分の思い込みで事態を解釈するほうに傾いている，というのです。

ただし，これは 2016 年の状況だけの話ではありません。現在も，ごく基本的な科学的事実だと思われているような，例えば温室効果ガスの影響や，コロナワクチンの有効性の問題に関しても，それぞれの思い込みや党派的な見方から異なる「真実」が語られたりします。また後ほど伊藤さんから，ポスト真実の文脈がどのようなものだったかをご説明いただけると思います。

「ソーシャルメディアは気持ちが良いので，読者が喜んで自分の欺瞞に参加するポスト真実の冥界（地獄）になりました」というのはグラスゴーにある『ヘラルド（The Herald）』とい

う新聞の記事での表現ですが，やはりこれも OED にピックアップされています。このような状況が拡大したきっかけというのは，この記事が示唆するように，インターネットによるところです。コーネル大学のロナルド・エレンバーグ（Ronald G. Ehrenberg）は，インターネットはわれわれのゲームを変えてしまったのだと指摘しています。

社会において人々は，基本的には客観的な情報に基づいてやりとりしますが，事実誤認などの誤った情報や故意に広められた詐欺的な偽情報を受け取ることもままあります。フェイクニュースというのは，これらの誤った情報や偽情報をインターネットなどのメディア上で拡散し，一見，ニュースのようなストーリーにみせかけ，ときには単なる冗談の場合もありますが，政治的な影響を与えることを目的とするものです。笹原さんのご講演では，このあたりについて，さらには人々の認知の問題を含めて，詳しくお話しいただける予定です。

そこで今回のシンポジウムになぜこの問題をとりあげたか，ポスト真実がなぜ図書館で問題となるのかを申し述べると，こういうことです。

フェイクニュースは，正確な情報の伝播を阻害します。そして人々の認識を歪め，人々のつながりを分断し，民主主義を蝕むものといえます。また，それは図書館が果たしてきた，正確な情報へのアクセスの提供，コミュニティを育むという役割と逆に作用するものです。『ライブラリー・ジャーナル（Library Journal）』の編集に長い間携わってきたベリー（John Nichols Berry III）という方が，以前コラムに，この

フェイクニュースのようなことが「おそらく図書館史上最も困難で重要な課題」になると書いていました。

「ポスト真実」下の図書館

そこで図書館はどういう姿勢をとってきたかを振り返ってみますと，一つは，世界人権宣言に綴られた，知的自由を擁護・推進する立場からの対応であります。日本図書館協会の「図書館の自由に関する宣言」では「図書館は，国民の知る自由を保障する機関として，国民のあらゆる資料要求にこたえなければならない」としています。資料・情報の収集・提供は，日々の営みではさほど強くは意識していないのですが，実は大変重要な課題です。誰もが出版された資料を購入できるとは限らないし，あるいは，絶版などのためにすでに市場で入手が難しい状態の図書もあります。それらを一般住民に無償で，閲覧ないし貸出の便宜を図り，人々の情報を受け取る権利を図書館が原則的に保障していると考えますと，その役割は重大です。またその範囲は今や，図書，雑誌，紙の媒体だけではなくてネット上の情報にも及びます。

表現の自由の保障のあるべき姿から，図書館をめぐる問題にさまざまな場面に分けて検討を加えた憲法学者の松井茂記さんという方が，『図書館と表現の自由』[1] というご本をお書きになっていますが，これは大変参考になる著作です。

もう一つは情報リテラシーの支援です。図書館は単に資料・情報を確保しておくだけではなくて，人々が情報の文脈を正確にくみとり，自主的に利用できるように支援しなくてはな

りません。これも知的自由の擁護に含まれます。情報リテラシーというのは大変広い概念です。児童のサービスから始まって，情報の入手，確認の手法，あるいは新しい情報機器の使い方など，さまざまな場面で使われますが，そのすべてが対象です。そして今では，ポスト真実を増殖させている新たな情報の生成・流通状況を理解し，それに応じた積極的な情報リテラシー支援が求められているというわけです。

とはいえ，この面で図書館がうまくやっているかといわれると，どうでしょうか。ハーバード大学のワイドナー記念図書館のM・コナー・サリバン（Matthew Connor Sullivan）が 2019 年に「図書館員はなぜフェイクニュースと戦えないのか」という論文を書いております。図書館員はフェイクニュースの状況を理解していないし，フェイクニュースがもたらす事態への理解が浅くて，それを回復する対策もできていないといっております。

改めて図書館にどのような対応が求められているかを確認してみますと，1 番目の領域（公平なコレクション）に関しては，資料情報へのアクセス保障を図書館は確実に担保しなければいけない。図書館員が内容に係る主観的判断によって特定の図書を廃棄してしまったような事件が以前ありました。これに対して裁判においては知る自由を侵したという判断が下っております。ただ，日本の図書館は，そうした偏った管理をしている図書館はあまり多くないという調査研究もあります。とはいうものの，インターネットを使ったサービスに関しましては，状況はかなり違うかもしれません。図書館に置

いてある PC にフィルタリングをかけている図書館が割とあるように思います。フィルタリングとは，たいてい幅広く情報を遮断してしまうものですから，ときに知る自由を侵す可能性があるといわれています。各図書館では，これらの点を改めて点検し，そのようなことにならないように対応していく必要があります。

二つ目の情報リテラシーといわれる領域に関しては，国際図書館連盟（International Federation of Library Associations and Institutions：IFLA）がつくった「偽ニュースを見極めるには」（図 1）というインフォグラフィック[2)]をみていただくとよいかと思います。井上靖代さんという方が日本語に訳されていて，見覚えがある方もいらっしゃるでしょう。基本的な原則をおさえたものです。ただ，先ほどのサリバンが，このような形式的な認識だけでは，フェイクニュースには対応できない恐れがあるというようなことをいっております。われわれはもっと，その実態はどんなものか，またフェイクニュースを流布させる情報環境がどのようになっているのか，きちんと理解しなければいけないようです。そこで，フェイクニュースの拡散や認知バイアスの枠組みを理解し，ニュースの現場をおさえてポスト真実下の図書館がなすべきところを考えよう，というのが今回のシンポジウムの趣旨でございます。

早速，お二方にお話を頂戴したいと思います。

笹原さんは，計算社会科学という分野の研究者でいらっしゃいます。フェイクニュースの研究を始められたのは，2016

年二度目の在米研究でインディアナ大学にいらっしゃったときだということです。

もう一方，伊藤さんは毎日新聞社の主に政治外交分野を担当されている専門記者さんです。「時の在りか」という連載記事を毎月お書きになっており，ご存じの方もいらっしゃるかと思います。本日は報道現場での経験をもとに，事実の意味合いを語っていただきます。

図１　偽ニュースを見極めるには

（出典：IFLA．https://repository.ifla.org/handle/123456789/223）

あとがき

最前のページで紹介したように，年に一度開催してきた当研究所のシンポジウムは図書館の未来を展望するテーマを掲げてきた。第 1 回は，そのための準備として「図書館のゆくえ」を模索するものとしたが，その後第 2 回以後は，少しこなれないカタカナ語が図書館とならんだ。「図書館とソーシャルイノベーション」「図書館とサステナビリティ」「図書館とランドスケープ」「図書館とレジリエンス」といった具合である。私たちのコミュニティのなかで図書館がどのような意義をもつかを追求するものだった。そのあとが，ここに掲載した「図書館とポスト真実」で，視座は少し異なるが，同じ意図だということは読みとっていただけるものと思う。

また，三つの論考では，今後の展望のなかで図書館活動をいかに実践していくかに関わる課題として，今回はメイカースペース，読書，インターネット時代の著作権というテーマをとりあげてもらった。

末尾ではあるが，お忙しいなかご講演・執筆に協力いただいた，笹原和俊さん，伊藤智永さん，渡辺ゆうかさん，太田剛さん，村井麻衣子さんには，改めて謝意を表したい。

また，今回本書を流通に乗せるために，種々ご助言とご尽力をいただいた樹村房の大塚栄一さんに感謝を申し上げたい。

図書館とポスト真実

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2021 （第 5 号）
ISSN 2433-2151

2022 年 5 月 12 日　第 1 版 1 刷発行

編集　株式会社 未来の図書館 研究所

発行　株式会社 未来の図書館 研究所
113-0033　東京都文京区本郷 4-9-25　2 階
TEL 03-6673-7287　FAX 03-6772-4395
https://www.miraitosyokan.jp/

発売　株式会社 樹村房
112-0002　東京都文京区小石川 5-11-7
TEL 03-3868-7321　FAX 03-6801-5202
https://www.jusonbo.co.jp/

印刷　株式会社 丸井工文社

本書の無断転載を禁じます。　Printed in Japan

ISBN978-4-88367-366-7　C3300